

茶の湯文化学会会報 No.59

第59号/2008年12月13日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

ベトナムから ―第二十六回研究会報告― 青木康子

本年度の研究会はベトナムのハノイで開催された。日程は九月四日の夕方から九月八日の早朝までで、現地滞在は三日間である。九月八日の夕方、関空で羽田からの十六名と合流し総勢二十七名と、添乗員一名の出発となった。

翌日の九月五日は、ハノイ国家大学においての茶文化交流である。ハノイ滞在の三日間、同じハノイホテル泊であったが、この朝のみ朝の時間に余裕があり、ホテル周辺を歩くことができた。市場や朝の人々の生活に触れることができ、なかなか面白かった。近くの中学校では七時から校庭で入学式が始まり、とても賑やかであった。坐る時は、鮮やかな色のプラスチック製の椅子―日本での風呂場で使う椅子に似ている―に生徒達は坐っていた。この椅子は町でもよく見かけた。

ベトナムでは生徒の数に対して、学校が不足しているとの聞いた。遅刻して注意されている在校生がいるのは、いずこも同じ光景である。母親にバイクで送ってもらおう生徒も何人居た。

朝の通勤通学もバイクが多く、朝、母親のバイクの後でカップラーメンを食べている少年が居たり、夕方

の帰宅時、一家四人、赤ん坊も入れて五人、一台のバイクに乗っていたりする。家族が密着して、それ程遠くない距離に職場や住居、学校があることがうかがえる。

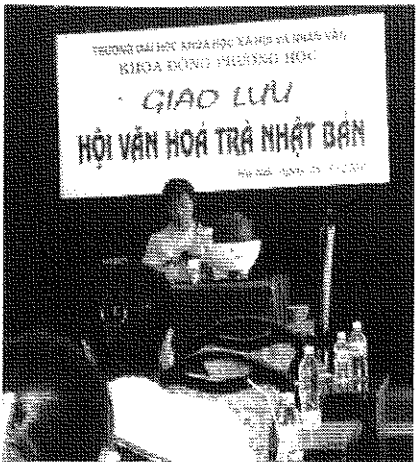
ハノイ国家大学も始業式の日で、学生達の輪があちこちに出来ていた。交流会は人文社会科学大学東洋学部日本研究科の先生方や学生達と行なわれ、まず谷晃会長「茶の湯とは何か」と題して茶文化と日本の茶の湯について、続いてベトナムで長らく陶磁器の研究をされている西野範子氏の「ベトナム陶磁史と茶の湯」の講演があり、質疑応答の後、休憩をはさんで、学生達は浴衣を着て、立礼のお点前が始まった。谷会長が日本から配んできた干菓子と、点て出しにより出席者全員に茶がふるまわれた。茶碗は現代の紅安南などであった。点前の学生は風炉の位置が高いにもかかわらず、なかなか落ち着いたお点前を見せてくれた。この学生達の純朴な感じは日本ではなかなか見られない様思った。会場にいる日本研究科の学生は全員女子で、休憩時にやっと一人男子を見つけ、話しかけたら隣の中国研究科の学生であった。

午後は十一世紀に李朝が築いた昇竜(タンロン)皇

城の遺跡見学である。遺跡内にあるベトナム戦争時の地下司令室へも行った。地下の臭いが時の経過を感じさせた。

その後、茶館に行き蓮茶を頂いた。蓮茶の苦みもなかなか良い味であった。テレビ局の取材もあり、谷会長の談話が放映されたそうだが、我々は見られなかった。

次に行ったのは水上人形劇場である。村の収穫祭か何かで、青空の下、池で村の若者達が人形を操り演じる情景を想像した。飲み食いしながら村人達と賑やかに見物したら、さぞ楽しかろうと思った。



学生のお点前

九月六日は早朝からモクチャウの茶畑に向けてバスで出発。片道五時間の道のりである。



途中少数民族の村々を通り、興味深い風景であった。ラオス国境に近いそうである。茶畑は日本人の中野氏が一人で管理されており、茶の栽培に適した山岳地帯、この地での仕事について話された。少数民族の土地の女性達はそれぞれの民族衣装を着て迎えてくれ、手料理でもてなしてくれた。レストランの料理よりも何よりもこの時の料理が私にはおおいしく、中野氏の配慮によるものであるが、料理担当の女性に直接お礼を言いそびれたのが少し悔まれる。この時の娘さんといい、前日の大学の女子学生といい、少し昔の日本の娘さんの様な懐かしさを感じた。

七日も早朝出発で、バスで陶磁器の村パツチャンへ。実際に型に流したり絵付けをしたり製品を作っている所や古窯を見学した。そこからバスでハロン湾へ移り、チャーター船でクルーズ。船中では海鮮料理の昼食。世界遺産のハロン湾内は湖の様に波もなく、天気も良く眠くなる位穏やかであった。たくさん島の列なりもよく見えた。湾内には船で暮す人々の村があり、船の小学校もあるのに驚いた。夕食はベトナム風フランス料理であったが、二階から降りてくると二階の庭ではアオザイを着た三人の女性達が三種の弦楽器の合奏をしていた。哀愁を帯びたメロディに心惹かれ離れがたい思いがした。

その夜の便で日本へ向ったが、開空到着は八日の早朝で、余り眠らず日本での一日が始まったのは、ちよつと厳しいものがあつたが、とても楽しい旅であつた。この旅を企画し、尽力してくださった役員の先生方やベトナムの方々に感謝申し上げます。

理事 会

平成二十年六月二十九日(日)午後二時より、池坊短期大学第二会議室で平成二十年

第一回理事会が開かれた。理事のほか、幹事も含め、十四名が出席した拡大理事会で、議題は以下の四題であつた。

- 一、今年度事業計画の詳細
- 二、会長候補選考委員会の選任
- 三、財政再建の具体的策定
- 四、その他

一では、まず、各地区例会の今年度の実績と予定についての報告があり、続いて研究会については、第二十六回がベトナムでの茶文化交流(九月四日〜八日)、第二十七回が彦根開催(平成二十一年二月二十一〜二十二日予定)となつた。また、会報は計画通り、年四回発行のペースで順次進んでいること、会誌は十五号が完成し、今年度中に十六号を発行して遅れを取り戻す予定であることが確認された。

二では、神谷副会長が内規を読み上げて確認したのち、これに従って三名の選考委員が推薦・選出された。今後は、十二月開催予定の理事会で経過報告をして方向性を示し、平成二十一年三月の理事会で会長候補者を選出することにまつた。また、内規の条文については、会誌十六号に掲載することとなつた。三の財政再建については、今後毎年百五十

万円程度の赤字が出ると予想されるので、このうち五十万円を経費削減(通信費・会場費の節約)で、残り百万円を会費収入の増加で対処したい旨、谷会長より提案があつた。これを受けて会費増収案についての討議が行なわれ、例会の場所を増やす(北陸・静岡・九州・大阪など)、PRを全国的に広げる(大学茶道部・中国茶や紅茶団体誌・美術館博物館などへのアプローチ)、見学会の企画を増やす、入管割引等会員の特典を図る、ホームページの内容を充実させる等々、さまざまな提案が出、今後具体的な方策をリストアップして各理事で手分けして推進することになつた。

四については、とくに意見はなく、理事会は終了した。



永島福太郎先生の思い出

山下桂恵子

先生に最初に茶道史をお教え頂きましたのは昭和三十七年四月、裏千家茶道研修所(現、裏千家学園茶道専門学校)で「古典」という科目の授業でした。「図録茶道史」(林屋辰

三郎著・村井康彦図版解説)が教科書として用いられ、ほかに「文字の歴史」「茶道の成立」「点茶の源流」「茶会記(抜粋)」「習見聴諺集」「喫茶往来」「儒林」「南方録(覚書)」「大灯国師遺誠」などのプリントがあり、月に一度の授業が楽しみでした。

翌年三月、堺の南宗寺・妙圀寺・祥雲寺・大安寺・紹鷗の墓・利休の墓などの現地ご教授には先生と一緒の写真があります。その写真は同窓会誌『学園二十五歩み』に「堺南宗寺見学(永島福太郎先生提供)」として掲載されました。

卒業のち、疑問や感想などを報告申し上げるようになりました。お忙しいにもかかわらず、ハガキに走り書きでもお返事をお送りしました。ある展覧会での感想などをお送りしました。今まで拝見したことのない、ひよろひよろしたようなお字で「点滴十日間生きています……仰せの件、茶道辞典で今少し分かりませんか。解説者は孫引きでなく、自分で調べて書くことです……」というお葉書を頂きびっくり、そしてたいへん恐縮致しました。

昭和五十五年秋、東京国立博物館で特別展「茶の美術」が開催(同五十九年三月、『特

別展図録「茶の美術」が刊行）され、そこに初めて表千家所蔵本『山上宗二記』全文の写真図版が公開されましたので拡大コピーして読み始めました。しかし、どうしても読めない文字や、読めたと思う文字も不安でしたため、お許しも頂きませうちに勝手に原文と読みを原稿用紙数枚に記し、通信ご教授をお願い致しました。厚かましいお願いをしたものと、いま思い返しまして冷や汗が出ます。全文をご覧いただくのに一年余りかかりました。

「『宗二記』を勉強するなら先学の研究をよく読むこと」「出典を調べるとよい」「孫引きせずに自分で調べなさい」、がその時のお教えでした。そこで『宗二記』記載の道具すべてと事柄を茶会記やその他の資料で照合しました。

一、表千家所蔵本『宗二記』の宛名に「雲州 岩屋寺参」と記されるが、岩屋寺和尚を介して同寺の檀那三沢宗程に贈呈した伝書であること（『山上宗二記』を贈られた「宗程」年報『月曜ゼミナール』第1号 平成四年）、

一、『宗二記』に慈鎮和尚の歌と記される「けがさじと」と、は明恵上人と唱和した「性禅」という人の歌であること（『山上宗二記』

所掲の「けがさじと」の教歌『平成六年九月号』淡交）、

一、現在の通説に「紹鷗茄子」は三点存在するとされるが、『宗二記』や茶会記ほか、織豊時代の記録に「紹鷗茄子」と記されるのは、「松本茄子」とも呼ばれる茶入（静嘉堂文庫美術館所蔵）一点のみであること、また茶道辞典や図録に信長名物「つくも茄子」とされる茶入は、秀吉名物の「似たり茄子」であること（『天正十三年禁中茶会の茶入「茄子二つ」』『茶の湯文化学』十一号）、
などが分かりました。これらは「出典を調べよ」、のご教示の賜物でした。

昭和六十二年、絵巻『猿の草紙』を大英博物館展で拝見、連歌会のと台子に向かって茶を点でている猿と、座敷に茶を運び回している猿に、先生の「連歌と茶湯は表裏一体化していた」が思い起こされました。暑中お見舞いに、お茶を運んでいる猿を模写して絵の下に「（先生）茶の湯は連歌師のワキ芸である」と記してお送りしましたら「お猿のお点前、大英博物館展で寓目、大懐かしかったです」、のお返事を頂きました。

平成二年四月、虎ノ門ホールで「利休の出世」というご講話を同期の友人と拝聴しました。二十五年振りにお聞きするお講義でした。

利休没一〇〇年前に足利義政没・コロンブスの大陸発見、二〇〇年前に一休さん誕生、三〇〇年前に西大寺の叡尊寂、四〇〇年前に栄西禅師が宋から茶を伝来、頼朝、鎌倉幕府を開く、そのまた四〇〇年前に平安遷都、という具合に「利休没一〇〇年前、一〇〇年後、三〇〇年前後、四〇〇年前後、というように覚える」とよい、一、二年くらい違ってもよろしい」、のお話は大筋を覚える方法として特に印象に残りました。ご講演の後、神田のうなぎ屋で夕食、東京駅デパートでのお買い物にもお供致しました。

豊臣秀長に対する古溪和尚の仏事法語の一節「陶朱倚頓の富を咲倒し、席上に奇珍を運び出す」、を先生は「とりわけ関心：注目した」、と記しておられますので（『古溪和尚と蒲庵稿』昭和四十年七月号『淡交』）、大和長谷寺の遠景を描き、脇に「咲倒陶朱倚頓富 運出席上奇珍 蒲庵」、と記して暑中お見舞いを申し上げますしたら、「長谷寺と秀長の寓意画、驚異です…小冊子を呈上します…」のお返事と、「豊臣秀長と利休居士」『興福寺仏教文化講座』の冊子を頂きました。

先生は、秀長の巨富は秀吉の軍費を支えたものだったこと、社寺復興や文化財保護、和



東京例会

（平成十八年十一月二十五日）

「今泉雄作について」

依田 徹

今泉雄作（号・無碍庵、常真居士、也軒／一八五〇～一九三二）は、明治・大正期にかけて活躍した美術史研究家であり、京都市美術工芸学校、東京帝室博物館美術部長、大倉集古館館長などを歴任した同時期の権威であった。加えて今泉は岡倉天心（本名・覚三）の文部省・東京美術学校における同僚であり、岡倉と茶の湯との関係を考える上での重要人物でもある。

今泉の人物像の特徴は、芸事に造詣の深いという点である。茶道は石州流怡溪派に通じているほか、御家流の香道、真勢中洲派の易学、七弦琴などと幅広く学んでいる。またフランスに留学していた際には、ラテン語やサンスクリット語、更には古代エジプトのヒエログリフまでも学んでおり、明治期の知識人としても異色の存在である。

その著作は陶磁器や茶道具に関するものが

歌山市・大和郡山市発祥の恩人であり、それが天下泰平の平和の世の到来を祈願するためだった、と秀長を追慕なさっておられます。

平成三年の七夕さまの日、駿河台で「華道山村御流」師範研究会のご講演があり、「開山さま（後水尾天皇第一皇女）御年譜」というプリントを頂きました。東山時代から始まった「花」のこと、宮家の七夕の花合せの記録、この頃はお花を生ける、ではなく立てる、とあってのこと、能・お花・お茶は元を正せば和歌である、などのお話がありました。

翌年、同窓会の翌日に友人と奈良見物を予定していることを申し上げましたところ、思いもかけず春日大社・依水園・薬師寺・「華道山村御流」お家元の円照寺・慈光院などをご案内頂き感激いたしました。奈良公園の鹿の群れ・三笠山の遠景・猿沢の池・興福寺の五重塔を眺め、お話を伺いながらの大和めぐりは忘れられません。

先生の傘寿・卒寿のお祝い会を同期の有志で同窓会前日に催しました。先生はお酒の類は一滴もお口になさいませんが、終始ご機嫌よくお過ごしくださいました。

平成十八年の初釜に披露された鳥井宗室あて利休居士書状に「玉礪雨の絵」「般若の壺」

「宗伝」などの語句を拝見し、すぐに『宗二記』の「玉礪八幅：瀟湘夜雨 九州、カタ宗叱二在」が想起されました。早速、先生にそのことをご報告し、写真をお送りしてご解説をお願い致しましたところ、「玉潤の絵・般若の壺・為替の問題、いろいろある、いい手紙を見つけたネ」、とお喜びくださり「資料紹介の形で一文になさい」、とおっしゃってくださいました。「肥肉を削れ」「学問にならない」「突っ込みが足りない」「ステル」「不要」「要、再考」「ダメ」「くだい」、等々の指摘箇所がなくなるまで何度も書き直して『茶の湯文化学 十三号』に発表することができました。私などが先生直々のご指導を頂きましたことはまことに勿体ないこととございました。

九十五歳八月というお歳（平成二〇年八月十九日）を思えば天寿を全う遊ばしたと申し上げねばなりませんでしょうか。まだまだお元気で長生きなさって頂きたかった、と思わずにはいられません。

歴史の勉強も殆どできておりませんが、少しでも茶道史に関心を持つことができたことは偏に先生のご恩と心より感謝申し上げます。合掌。

多く、また茶の湯研究への貢献としては帝国図書館（現・国立国会図書館）へ自ら収集した茶書コレクション（通称「今泉文庫」）を寄贈したことで名高い。

特に研究者としての今泉の功績を考える上では、美術雑誌『國華』に掲載された論文群が重要である。この雑誌は明治二十二年に岡倉が創刊したものであり、以後の日本・東洋美術史の発展に大きく寄与している。今泉はその創刊号から連載を始めた「茶室考」以降、「本邦陶説」（同二十三年）、「君台觀左右帳記考証」（同二十四年）、「髹飾録箋解」（同三十二年）など、茶の湯に大きな関連を持つ論文を発表してゆき、これらはそれぞれの分野における研究史の最初に位置するものとなっている。殊に明治期においては、茶道具は今日のように美術作品として評価をうけていたわけではなく、今泉の活動は茶道具が「日本美術」に位置付けられていく上での重要な出来事であった。

これらの論文の中で今泉が行った作業とは、陶磁器の分類分け、あるいは文献に登場する工芸作品名称と実作品との照合などであり、それは今日に続く研究の基盤形成であったと言える。研究が積み重ねられた現在から見る

と成果に乏しく映るが、資料も作品情報も限られた中であって、日本・東洋工芸史全般の構築を試みたその労苦は多大なものであった。

また岡倉との関係を考える上で重要な点は、岡倉の英文著作『茶の本』（原題：The Book of Tea）への影響についてである。『茶の本』には典拠を『南方録』や『茶話指月集』と見るべき記述が散見されるが、天心の息子である岡倉一雄は、その著作『岡倉天心を繞る人びと』（文川堂書房／昭和十八年）において、岡倉の蔵書には茶の湯関係の書籍は含まれていなかったと述べている。ここから岡倉に茶書を貸与した人物を想定しようとすれば、身近な茶書コレクターとして今泉の存在は注目すべきものとなるだろう。また『茶の本』の茶室の章には、今泉の「茶室考」を典拠としていると思しき部分も見られる。特に岡倉は『國華』の編集者であったため、確実にこの「茶室考」を読んでいるという点も重要である。こうした茶の湯の専門知識に関しては、『茶の本』への直接的な影響も考える必要があるだろう。

研究者としての今泉は、今日でこそ等閑視されているものの、充分な関心も無かった時代に、美術史に茶の湯研究の土台を築いた人

物であった。それは岡倉の『茶の本』のように表面上の影響こそ見られないものの、茶の湯と「美術」との結びつきを考える上では、重要な役割を果たした人物なのである。

「相伴者同伴の貴人のもてなし（点前編）」
岩田澄子

貴人とは「家柄や地位・身分の高い人」だが、絶対的基準はなく、同席者の目線で決まる。貴人が相伴者同伴の時に注目される茶道具は、客ごとに使い分けが出来る茶碗である。茶碗の格は、天目が真で、天目台にのせて使う（台天目）。一方、天目以外の茶碗（和物、高麗物、唐物磁器）は草の格で、通常は台にのせないが、時代や状況により台にのせる。

茶書では、以下の三つの型がみられた。A 貴人と相伴者の茶室・接待人が異なる（『大乗院寺社雜事記』）、B 同席・同じ接待人だが、点茶法や道具などを区別（『教寄道次第』、『烏鼠集』、『天王寺屋會記』、『松屋會記』）。三つめは、AとBを同日に行なうもので、天正十三年の禁中茶會がある。相伴者に二段階あり、①天皇と同席の相伴者、御菊見之間（点前：秀吉）の茶会后、②別室の相伴者、端之御座敷（点前：利休）の茶會が行なわれた。

①天皇の席は、ほとんどが新調された茶道具、
②相伴者の殿上人には、秀吉自慢の名物が使われた。

次に、諸流（表千家流、裏千家流、遠州流、石州流）の点前を比較した。表千家流は、昔は台天目が正三位以上、台飾は従六位以上従三位以下の貴人に使われたとされる。一方、裏千家流で貴人点と称する点前は、茶碗（天目ではない）を白木の台にのせて使う。また、その応用点前である貴人清次では、相伴者用に煤竹茶筌や千鳥茶巾など、他の点前にはない特別な方法が準備されている。

なぜ、表千家流と裏千家流の作法が大きく異なるか？ ヒントは宗旦以後の三千家の仕官先と官位にあると思われる。表千家は宗左以降、永きにわたって紀州徳川家（従二位）に仕官した。一方、裏千家の宗室は、加賀前田家（従三位）に仕えたが、京都の茶亭重視のため、長くは続かなかつた。大名の家格と点前を検討の結果、表千家が台天目を「正三位以上」としたのは、紀州徳川家（従二位）を尊重し、その目線を配慮したものと思われる。例えば、紀州徳川家（従二位）と加賀前田家（従三位）を、別格に扱うことが可能になる。

一方の裏千家では、台天目が正三位以上の基準では、対象者がいない可能性があった。そこで考えられたのが、新しい茶碗と白木の台を使う「貴人点」ではないか。裏千家が採用した貴人点は、一見すると台天目よりも格が低い点前に思われる。しかし、道具の新しさを前面に出し、積極的な意味付けが行なわれた。前掲の禁中茶會で、天皇用に新しい茶道具が使われたように、道具の新しさ・神聖さの強調は、世俗の階級や権威を飛び越えた位置づけを可能にする。

年表や限られた資料を基に検討を試みた結果、裏千家流の貴人点の成立は、一七七一〜一八三九年。貴人清次成立は、玄々斎関連古文書で「清次点、清次貴人点」などの名称変動がみられるため、玄々斎在位時の一八二六〜九三年と推察した。

十八世紀後半以降、入門者の増加により、諸流で相伝教授法が整備され、近隣の裏千家と表千家は、各々独自の存在感を示す教授内容を模索したと思われる。その中で、表千家流が貴人を二段階に分け、台天目を正三位以上の貴人対象とした。一方、裏千家流は独自の価値観により貴人点を考案し、貴人清次で小習項目に多彩さを加えたものと思われる。

。検討を通し、「諸流が考案した貴人点前は、ある時代・ある立場において、その流派を支持してくれる大切な人々の目線を尊重し、最善のものを追及した結果である」と改めて確信した。

さいごに、貴人清次の今日的意義について。日常の稽古時においては、むしろ虚構性（貴人役と家来役等）から生まれる、RPG（役割を演じるゲーム）機能によるリフレッシュ効果が大きいと思われる。今日では最も実用性に欠ける点前だが、化石ではなく、より積極的な価値が認められることを期待する。

（平成二十年一月二十六日）
「唐物香合について2―近世を中心に―」
多比羅菜美子

漆塗りの唐物香合（以下、唐物香合）について、近世の茶會記を中心に考えてみたい。前回の発表では、室町時代までの唐物香合についてみてきた。今回は、茶會記にみる唐物香合の記述を中心にみることによって、近世の唐物香合の用いられ方がどのようなものであったかをみてみることにした。

茶會記に唐物香合が記述された例としては、堆朱布袋香合があげられる。『松屋會記』の

天文十一年四月八日(一五四二)の記述に「立布袋香合」とあるのがそれで、侘茶の席に香合が用いられた初見でもある。侘茶の席で香合が用いられた当初には、これまでの唐物香合の価値観に添ったものの中から選び取られたように思われる。「布袋香合」は堆朱や螺鈿の例がその後の茶会記にもみられ、流行したことがうかがわれる。また、伝世している作例をみると明時代頃の製作にかかると思われる作品が多いことから、国内での流行にあわせて注文して手に入れた可能性も考えられる。まずは、『宗湛日記』から炭点前成立頃の茶会記にみる香合をみてみよう。香合は、日記の当初は香炉とともに記述され、床に飾られていた。慶長二年頃までは香炉や香合に関する記述は少なく、床に香炉や香合を飾ることは少なかったようである。慶長二年以降になると、香合は炭斗と並べて記述されるようになる。これは、香合が香炉と組み合わせられた床飾りの道具としてではなく、炭点前中のみるべき道具として捉えられ、記述されるようになっていくことをあらわしていると思われる。

までの間に催した茶会で遠州が使用した香合は、二十八種ほどである。そのうち、唐物香合が全体の六割を占め、全体では漆塗りの香合がやきものの香合を大きく上回っている。特徴としては、小堀遠州の茶会記には青貝(薄貝螺鈿)の香合が多用されており、青貝香合を用いた例は、室町時代の記録にはほとんどみられないため、近世初頭以降の傾向かともわかれた。また香合の寸法も、炭点前が成立したこの頃から香合の小型化がはじまったようである。「大香合」という言葉がみられるようになり、香合の大きさが炭点前の道具として用いられる香合と、書院の棚飾りなどに用いられるような「大香合」に分けられていったことがうかがわれた。

『槐記』も『伊達綱村茶会記』とほぼ同様の傾向で、やきものの香合が多くなっている。形に特徴のあるいわゆる形物香合がみられ、技法、形の多様性はさらに進んだようである。近世の茶会記にみられる漆塗りの唐物香合の記述から、慶長年間頃にはじまる炭点前の成立を前後として、香合を鑑賞する場が茶室の中で変化したことがうかがわれた。これまでの床飾りでの使用に代わり、炭斗に仕込まれたそれは、おそらく従来の香合よりも小振りであったり、鑑賞に供される場ができることとなるなどの変化があったのではないだろうか。香合は大きさと文様を吟味した上で取り上げられたと推測され、唐物香合もその需要に応じたものが伝世品から選び取られたほか、半ば注文品として将来されたものであったのではないかと推測された。

東海例会

(平成十九年九月二十八日)

「名物裂」と明時代の出土染織

吉岡明美

明より舶載された絹織物は、室町時代以降、唐絵の表装や茶入の仕覆に珍重されてきた。安土桃山時代から江戸時代後期にかけて、表

装や名物茶入の仕覆に用いられた裂地には角龍金襴、織部緞子などそれぞれ個別の名称がつけられていき、やがて「名物裂」と総称されるようになる。近年、中国の明墓からは「名物裂」に共通する数種の織物が出土している。特に注目されるのは、万曆皇帝(一五六三〜一六二〇)墓から出土した皇帝着用角龍金襴帯である。皇帝専用とされる五爪の龍を角形の文様にした赤地金襴で、同種の金襴が玉潤筆「瀟湘八景図」の「遠浦帰帆図」(重文 徳川美術館蔵)「洞庭秋月図」(重文)「山市晴巒図」(重文 出光美術館蔵)の一字・風帯に用いられている。さらに『天王寺屋会記』『宗湛日記』により、現存しない「煙寺晚鐘図」「平沙落雁図」も同様の表装であったと推察され、「瀟湘八景図」の内、六幅に万曆皇帝の帯と同じ金襴が用いられていたこととなる(上下、中廻しの表装も六幅共通)。

からは細川緞子と同種の絹織物が出土しており、名物裂緞子の製作時期を窺い知ることができる。今後のさらなる中国の発掘報告に期待したい。

直弼の禅の精神に裏付けされ石州流、片桐宗猿の指導も受ける。茶名は「宗観」「無根水」で埋木舎の茶室「澗露軒」において茶の修業を専らにする。「入門記」では「茶道は心を修練する術である。」とか「真の茶道とは貴貧富の差別無く、自然体で常時心静めて喫茶する修業」等述べている。この他「梅尾みちふみ」や「閑夜茶話」も執筆している。また直弼は「茶湯三言四句」や「茶道の政道の助となるべくを論(あげつら)へる文」も記しているが、大著は「茶湯一会集」である。

茶会記には、丹(赤)地角龍あるいは升龍金襴と記され、初出は永禄十年(一五六七)天王寺屋道叱の会である。すなわち万曆皇帝と同時期に皇帝専用の金襴が我国に渡り、唐絵名品の表装として日本でも用いられていたのである。また嘉靖十二年墓(一五三三)からは織部緞子と、万曆三十二年墓(一六〇三)

譜代筆頭・彦根三十五万石の藩主、幕末の大老、井伊直弼は所謂「お世継ぎ」ではない。十一代藩主・井伊直中の十四男として誕生した直弼は五才で母を、十七才で父を亡くしたので藩の「掟」に従い、十七才から三十二才迄の十五年間を藩の「北の屋敷」で三百俵の捨扶持で弟と生活することとなる。直弼はこの公館を「世の中をよそに見つとも埋れ木の埋もれておらむ心なき身は」と詠じ「埋木舎」と名付けた。「茶・歌・ポン」とがあるほど茶道、歌道、謡曲(能の鼓)は特にこの埋木舎で修行し、他にも国学、蘭学、書、画、湖東焼、染焼、禅、仏教等の文化人としての修練は各々、家元の水準迄達したと云われる。勿論、武人の為、弓、馬、剣道、居合術、柔術、兵法等武道にも練達し、文武両道を極めた。

「一期一会」の精神や更なる「余情残心」「独座観念」の直弼茶道の真髓・心について論ずる。論者の曾祖父・大老側役・大久保小膳も直弼の茶道の高弟にて「宗保」の号をもらい、茶器等も拝領し、明治四年以来「埋木舎」そのものも各種功績にて贈与され大久保家代々で保存している。彦根城佐和口多聞櫓前、国特別史跡にもなっている。

第二十七回研究会のお知らせ

今回の研究会は、平成二十一年二月二十一日(土)・二十二日(日)の二日間に亘りまして彦根城博物館を会場とし、彦根城と彦根藩主

井伊家の周辺を研究視察いたします。詳細に付きましては、同封のパンフレットをご参考の上、参加ご希望の方は学会事務局まで申し込み下さい。

平成二十一年度大会発表者の募集

平成二十一年度大会の日程と会場が左記の通り決まりました。

日時 平成二十一年六月十三日(土)
会場 京大会館(京都市)

研究発表の部は、例年通り一人三十分(発表二十分質疑十分)を予定しておりますが、その発表者を募集しておりますので、ふるってご応募下さい。なお、応募される方は、二月末までに発表のタイトルを事務局までお知らせ下さい。予定人数に達し次第締め切らせていただきます。

なお、十三日は研究発表とシンポジウム(未定)と懇親会を予定しております。

例会の案内

東京例会(会場 五島美術館講堂 午後二時)

日時 一月三十一日(土)

演題 「貴人と相伴者―茶室編―」

岩田澄子氏

演題 「墨蹟研究」

名児耶明氏

高知例会(会場 高知県立文学館慶雲庵茶室)

午前十時

日時 二月二十二日(日)

内容 「茶の湯と陰陽五行」

このほか、一般の方々が茶の湯に親しんでもらうための茶席を、毎週日曜日を主体(十時〜十六時)に同所で設けます。

後記

例会の掲載につきましては、編集上の都合により、各例会の開催時期の順序が掲載時に前後することもございます。ご理解のほど宜しくお願い致します。
なお、ご迷惑をおかけした方にはこの場をお借りしてお詫び申し上げます。

